

Title	(海外報告)アメリカ文化・デザイン・国際ゼミナール
Author(s)	藪, 亨
Citation	デザイン理論. 1985, 24, p. 114-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52634
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

(海外報告)

アメリカ文化・デザイン・国際ゼミナール 藪 亨

この夏、西部開拓時代の名残りととどめるアメリカ中部の都市カンサス・シティーを訪れました。大阪芸術大学がカンサス・シティー美術大学 (Kansas City Art Institute) と共催した「アメリカ文化・デザイン国際ゼミナール」(International Seminar in American Culture and Design) (1985年7月20日～8月9日)に参加する機会を得たからであります。本ゼミナールが開かれたカンサス・シティー美術大学は、約百年の歴史をもつ美術とデザインの四年制大学であり、緑に包まれたその広大なキャンパスにはヴィクトリア朝風古建築の本部棟 (図1) を中心に各学科棟がゆったりと立っております。

さて、本ゼミナールは、体験的学習に重点を置いており、その中核のひとつは午前におけるヴィジュアル・コミュニケーション・コースでした。このコースの目的は、アメリカの美術とデザインの良きセンスを専門的に教えることであり、講師はデザイン学科のS・サイドリンガー教授とL・ボードリー助教授でした。そして、アメリカでの両講師の通常授業と同じ形式ですすめられたこの実習は、次の3課題からなっていました。第1課題は、アメリカの最もポピュラーなフォーク・アートのひとつであるキルトを手本としたパターン・デザインであり、3角形を規則的に配列して案出した基本パターンを複写機でコピーし、これを複数枚組み合わせることでキルト大の作品に仕上げました。その結果、思いがけない斬新なパターンが続出し、デザインがデザインを新たに生むことを教えられたのでした。第2課題は、本ゼミナールの宣伝パンフレットをテーマとしたタイポグラフィーであり、構成主義的なタイポグラフィーのやり方が、適確に指導され、完成作品はメディア・センターでTシャツに印刷されました。

最後の第3課題は、諸国の民芸品などの対象物を前にしてのドローイングであり、その基本的な心構えや技法が詳細に解説され、練習制作を経て色彩を伴った大画面の作品を仕上げました。こうした実習を通して印象的であったのは、教える側と教わる側との緊密なコミュニケーションの重視であり、また個性を重んじながらの明るく開放的な自由主義的教育でありました。

ところで本ゼミナールのもうひとつの眼目は、広くアメリカの生活と文化を紹介するための各種行事でした。本ゼミナールのディレクターのG.P.パリス教授の先導で午後、夕方そして週末にマイクロ・バスに乗りこみ様々なところでかけました。ことにその圧巻は、75年の歴史をもつホールマーク・カード社の見学であり、デザイン・スタジオへの入室が特別に許され、各種のグラフィック・デザイナーの仕事振りをつぶさに見ることができました。また他日には、当地のフランク・ロイド・ライトの住宅に案内され、その室内空間の日本的ともいえる厳肅な幾何学的秩序に強く心を動かされました。さらにはまた一方では、大学関係者などの家庭での晩餐会に毎晩のように招かれ、当地の生活習慣などを十分に体験しました。しかもこの折にはベッド・ルームを含めたすべての部屋を見せていただき、生活様式を知る上で大いに参考になりました。また特筆すべき行事としては、「生きのびるためのデザイン」の著者としてわが国でも評判になったカンサス大学のヴィクター・パパネック教授の特別講演があげられます。「デザインとは何か」と題したその講演は、教授のデザインに対する基本的な考え方のみを論じたものでしたが、論理的で説得力にみちていました。とはいえ、その機能主義的なデザイン論とアメリカの商業主義的なデザインとのずれが気がかりな点として残りました。

おおよそ以上のような内容からなった当ゼミナールは、そのまとめとして受講者全員（教員1名、学生9名）の課題作品を展示した展覧会（図2）を大学構内のケンパー・ギャラリーで開催しました。当地の新聞がその前日にこれを報じたこともあって当展はなかなかの盛会でした。そして最終日には、修了晚

餐会にひきつづいて修了式が本部棟内のバンダースライスの間で挙行され、G. パリーノ学長から修了証書が参加者全員に授与され、本年度のゼミナールの幕をとじたのでした。

なおわれわれ一行は、この後、ニューヨーク、サン・フランシスコそしてホノルルと研修旅行を約2週間にわたってつづけ、8月20日に帰国いたしました。



図1 カンサス・シティー大学本部棟

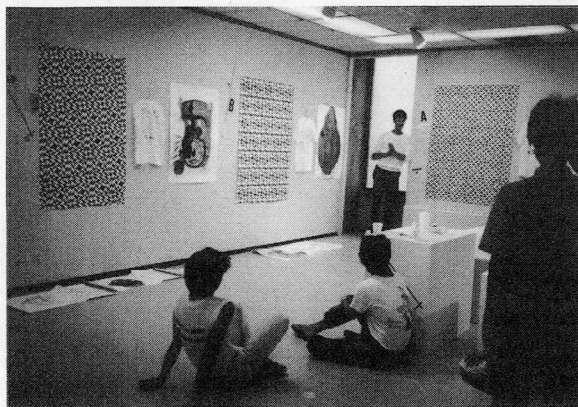


図2 ケンパー・ギャラリーに展示された課題作品を前にしての講評会